



10代の感性描く未来

地域課題の解決策おとなと考える

中高生と社会人らが地域の課題と解決策を語り合う「Teen's 未来デザイン・ワークショップ2025 in TORIDE」が、この夏、取手市内で初めて開かれた。10代の若者の創造性と社会人の経験を融合させ、街の未来を描こうという試みで、「ひとつ空の下で(UNSAM)」のメンバーも参加してアイデアを出し合った。

取手でワークS

取手市が主催し、UNSAMの大滝修・代表コーイチ(東京経済大学客員教授)が講師として、講座を統括した。

8月20日の前半では、参加者がそれぞれに「ほっておけないコミュニケーションの課題」を考えた。その結果、若者に関して「居場所のない子どもたち」「不登校問題」など、高齢者に関しては「移動困難」「老々介護」など、外国人に関する「授業についていけない児童」「経済不安」などが提起され、それぞれの人たちの取り巻く「孤立」が強く意識されて

いるとわかった。

それを踏まえた9月21日の後半では、「つながりをどう作るか」を話し合った。つながりを作るためのさまざまなイベントのアイデアが出され、その中で「ウォークラリー」や「歌とカフェ」「駄菓子屋さん」などが参加者同士で支持を集めた。



山本剛史さん(江戸川学園取手高1年)は、千葉県流山市で子どもの居場所作

子らの思い語る



話し合いの中では、子どもたちの居場所のなさや不登校について、UNSAMのメンバーが日ごろ感じていることを語った。

「不登校」学校に合わないだけ

話し合いの中では、子どもたちの居場所のなさや不登校について、UNSAMのメンバーが日ごろ感じていることを語った。



居場所あるが情報なく行けず



居場所があるが情報なく行けず

居場所があるが情報なく行けず

居場所があるが情報なく行けず



ウォークラリーを提案したUNSAMメンバーの鈴木まりあさん(県立取手二高3年)は「おじいちゃん、おばあちゃん、外国人の方、子どもたちが一緒にみんなで歩いたら、楽しく会話できると思うし、高齢の方は足腰も鍛えられる」とアピール。同じくメンバーの山崎心奈さん(土浦日大高3年)は「カフェで飲食しながら、みんなが自分



つながり作りのアイデアが次々と生み出された。国の歌とか民謡とか、校歌でもいいし、歌いながら交流できる継続的な場があればいいと思う」と訴えた。

人としてどう実現してあげられるのかなど、アドバイスできるのが面白い。普段なかなか接する機会もないから、お互いにいろんな刺激ができると思う」とワークショップの感想を話した。

ワークショップで出されたアイデアは今後、UNSAMが実現の道を探ることになっている。

取手市市民協働課の大隅正勝課長は「自治会や既存団体は高齢化や会員不足でイベントもできなくなっている。枠を作らない高校生ら若者の発想をいかして、そういう課題も解決できるんじゃないか」と期待を寄せた。

10代の感性描く未来 地域の課題解決 大人と考える

中高生と社会人らが地域の課題と解決策を語り合う「Teen's 未来デザイン・ワークショップ2025 in TORIDE」が、この夏、取手市内で初めて開かれた。10代の若者の創造性と社会人の経験を融合させ、街の未来を描こうという試みで、「ひとつ空の下で(UNSAM)」のメンバーも参加してアイデアを出し合った。

取手でワークショップ

取手市が主催し、UNSAMの大滝修・代表コーチ（東京経済大学客員教授）が講師として、講座を統括した。

8月20日の前半では、参加者がそれぞれに「ほっておけないコミュニケーションの課題」を考えた。その結果、若者に関して「居場所のない子どもたち」「不登校問題」など、高齢者に関しては「移動困難」「老々介護」など、外国人に関する「授業についていけない児童」「経済不安」などが提起され、それぞれの人々たちを取り巻く「孤立」が強く意識されているとわかった。

それを踏まえた9月21日の後半では、「つながりをどう作るか」を話し合った。つながりを作るためのさまざまなイベント

も鍛えられる」とアピール。同じくメンバーの山崎心奈さん（土浦日大高3年）は「カフェで飲食しながら、みんなが自分の国の歌とか民謡とか、校歌でもいいし、歌いながら交流できるといい」と訴えた。

ワークショップで出されたアイデアが次々と生み出された



14人が参加した後半のワークショップ=写真はいずれも取手市内

アイデアは今後、UNSAMが実現の道を探ることになっている。

社会人の参加者の一人で会社員の田川滋隆さん(42)は「(中高生は)大人にはない視点で、独創的な意見も出てくる。大人としてどう実現してあげられるのかなど、アドバイスできるのが面白い。普段なかなか接する機会もないから、お互いいろいろな刺激ができると思う」とワークショップの感想を話した。

取手市市民協働課の大隅正勝課長は「自治会や既存団体は高齢化や会員不足でイベントもできなくなっている。枠を作らない高校生ら若者の発想をいかして、そういう課題も解決できるんじゃないか」と期待を寄せた。



話し合いの中では、子どもたちの居場所のなさや不登校について、UNSAMのメンバーが日ごろ感じていることを語った。



山本剛史さん（江戸川学園取手高1年）は、千葉県流山市で子どもの居場所作りに携わる経験から、「不登校や学校になじめない子たちは、問題を抱えている子なのではなく、自分の好きなことを持ち、それを深めていく気持ちがあるけど、学校っていうものに合わないだけ。学校というのは一つの枠組みを提供している所に過ぎない。そこからみ出してしまいう人がいるのは当然で、不登校っていうのは学校っていうものの中で生きている人たちが作り上げてしまっている。問題というふうに当てはめているから問題なだけで、自分の興味を深めるきっかけになるのかもしれないし、そこから自分の道ができあがってくるかもしれない」と述べた。



鈴木さんも「小学校を何校か転校して、やっぱり合わない学校があって、行くのがしんどかった」と自身の体験を話した。

「不登校」学校に合わないだけ ■ 居場所あるが情報なく行けない